

拝啓 今年も早や1月末となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。今年の1月は快晴の日が多く、私の家の近所から、富士山(3776m)と南アルプスの北岳(3192m、日本で富士山の次に高い山)が見える場所がありますが、快晴の日にはそこを歩いて朝の散歩をしています。

今回は、小西芳之助先生の『わが主イエスよ—恵心流キリスト教・説教集—』の2回目ですが、ロマ書10章9-13節で、パウロがいかに称名を進めているかを、原語から読める色々な理由を挙げて、説明しています。小西先生がキリスト教の奥義(十字架の贖い)は、「難信易行」と言われますが、誠にその通り、私もキリスト教の奥義は難しいと思います。キリスト教だけではなく仏教その他の宗教も、宗教が天国、極楽、永遠の生命を扱う以上、難しいと思います。それは「称名」という簡単な行によって受けることが出来るというのが小西先生の教えです。その方法しか奥義を受ける道はないかもしれないとさえ思います。

今回の「第5の理由」として、次のように説明されます。「ユダヤ人とギリシア人の区別が無いということは、白と黒との区別がないということだ。万人に対して、イエス・キリストの贖いの無限の深さが向かっている。これは条件にあらずして、その無限の愛の深さを吸い取る麦わらみたいなものなのです。牛乳を吸うのに何か道具が要るでしょう。その神の無限の贖いの富を吸い取るのに、パウロは、称名と言う口を、説明したのです。」

暮れからお正月にかけて、小西先生の伝記を書く作業が進みました。今書いている伝記の組み立ては、第1部「小西先生の生涯」、第2部「ロマ書講解説教より」、第3部「同志会金曜会語録より」、第4部、「恵心流キリスト教の説教より」という構成で書いていますが、第2部のロマ書、第3部の同志会語録、第4部恵心流キリスト教のところは、なかなかはかどらず停滞していたのですが、正月休みに、そうだエンカウンターで紹介したことがある原稿を使えばまとめられると思い、その方針でエンカウンターのバックナンバーを取り出して編集作業しましたら、ずいぶん早くまとめることが出来ました。これから、数人の方に見て頂いたり、調べる箇所がありますので、今年末ぐらいに出版できることを目標に進めてみたいと思っています。

12月24日には、忘年山行として、陣馬山(855m)に登り、麓の陣谷温泉で、イノシシ鍋を食べました。1月14日には、山中湖そばの石割山(1413m)に登り、新年山行を致しました。快晴で富士山がきれいでした。1月17日に、大学時代の山の会のOB会があり、40人ほど出席者がいたのですが、1人ずつ1分で最近に登った山を話せということで皆さんが話したのですが、私が一番活発に登山を続けている一人のように思いました。低い山ですが、昔うつ病の時、先生から、行き易い手頃な山を持ちなさいと言われて、見つけた山に何年も登り続けているお蔭で、そうなったのだと思います。

今は一年で最も寒い時期ですが、皆様風邪などひかれぬよう注意され、お過ごしください。

2019年1月23日

山口周三

エンカウンターの読者各位